個人の市場価値の向上と生涯成長を支える

NEWS LETTER

EAT
Education for Asian Talents

株式会社人財アジア 定期ニュースレター

vol.43
2026 年 01 月

□ 岡村の最近の注目ニュース　□ ビジネス予備校近況リポート　□ B-EAT 会活動報告　□ What's up?

最近よく思い出す問いかけがある。

2026/01

2000 年代初頭に、９１１（米国同時多発テロ）をきっかけに米国が主導したイラク戦争において、軍事介入理由だった大量破壊兵器が見つからなかった頃の話だ。

国連に勤める友人とニューヨークでのんびりお茶を飲んでいたら、いきなり、「この世の中に絶対の正義があると思うか？」と質問された。皆さんならどう答えるだろう？彼は続けて、「国連勤務の９割の人は、“絶対的な正義など存在しない。力こそ正義だ。”と考えている」と言った。彼が国連の総意とは思わないが、自分が絶対的に信じる何かの有無が、生き方を大きく変えることをより強く意識するようになった。

スイスに 400 年以上の歴史を持つプライベートバンクがある。なぜそんなに長く続くのか、私の知り合いがオーナーに聞いた。皆さんはどんな答えを期待するだろうか？“不変の理念”との予想に反し、“理念も含めて何もかも変わり続けること”が答えだった。クリストフの講義を思い出す人もいるはずだ。彼がガラパゴス島に旅した時に目にした T シャツに書いてあったのは、“この世に生き残り続けるのは、最も強いものではなく、最も賢いものでもなく、環境の変化に自身を適合し続けられるものだ（ダーウィン進化論）”のメッセージだ。

過去の出会いや学びを振り返りながら、ふと人生を思う。
生き残りを目的にするか、信念を守るために生きるか？

皆さんもビジネス人生で何度も問われてきたことだろう。

1990 年代後半の米国 IT 株式バブルの生成と崩壊の学びを覚えているだろうか。1996 年頃から米国 IT 指数ナスダックが上昇を始め、その後４年間で５倍の 5000 ドルまで急騰した後に、一気にバブルが弾けて 1/5 に暴落した。FRB 議長のグリーンスパンすら、当初は“根拠なき熱狂” 急騰を揶揄していたのに、止まらない上昇を目の当たりにして、“ニュー・エコノミー” と日和見した。腕利きの運用者にとっては本当に苦しい時期だった。IT 株が何年も上昇を続けると、乗り遅れたのでは？と不安に駆られた個人や年金基金などの最終投資家が IT 株式不保持を攻撃し始めた。いつか営業も、ひいては経営も顧客側につき、運用者は孤立無援になっていったのだ。葛藤を抱えながら、信念に反して IT 株式をポートフォリオに組み込んだ運用者も少なくなかった。人生の皮肉は、流れに逆らえずに投資を始めた運用者が社内で生き残り、「頑固に」投資しなかった運用者は少なからず市場や会社から退場させられたことだ。

ビジネスでも人生でも、なりふり構わぬ生き残りか信念かの選択を迫られる。信念に基づく人生は清々しく聞こえるが、現実は複雑で多様だから、絶対と思われた正義が、後から相対的だったと気づくこともある。一方で、生き残ることだけを目的にすると、段々むなしくなる。自分軸あってこそ可能な“芸術的中庸”（普段は極端に走らず調和を保ちつつも、勝負どころの芯だけはぶらさない絶妙なバランス）を実現することが、生涯の幸せの面積を増やすコツか。何を譲り、何を守るかの判断に際して、私は関わる人々の“動機”を大切にする。動機が不純なら、行動は長続きせず、周囲に害を及ぼすからだ。あなたはいかなる軸を持つか？混沌とした今こそ、論理的思考力を鍛え、自分軸を堅固にする最良の時期だ。

前述通り、ＥＡＴ卒業生の方を対象にＥＡＴオンラインサロンを開く。過去の学びをどう現実に紐付けていくか、重すぎず、軽すぎず、近況報告もかねて意見交換していきたい。初回は 1 月 23 日（金）20 時 15 分スタート。ＳＬＡＣＫにＺＯＯＭリンクを掲載。不明点のある方は、人財アジア清古　generalaffairs@eat-star.asia まで。

今回寄稿くださった岩間氏は、私の人生の大先輩であり、次世代をより良くするために軋轢を恐れず発信を続ける方だ。そのために、自身の永続的な成長にも貪欲で、いまも学びの努力を絶やさぬ姿勢を手本としている。

注) この隔月ニュースの内容をさらに充実させ、発信していきたいです。メールアドレス等の変更は総務企画までお知らせくださいね！　（EAT 代表　岡村 進）

「時代を超越する グローバル人材の育成」

元 日本投資顧問業協会
会長
岩間 陽一郎　氏

正月休みに柳沢賢一郎氏の国境・幻想のボーダーレス・ワールド（1992 年丸善ライブラリー）を再読した。

柳沢氏は昨年、残念なことに亡くなられたのであるが彼の 1992 年当時の予見はまさに正鵠を穿つものであったと改めて思い起こしたからである。

全ての面においてグローバル化が進みボーダーレス化すると言うことは幻想に過ぎないと言う警鐘はまさにその通りであった。

トランプ米国大統領の MAGA 政策に象徴されるように反グローバリズムの潮流は強さを増している様な感がある。
ウクライナを巡る紛争は丸 4 年を経過し、収束の兆しすら見えないしイスラエルとパレスチナ紛争も泥沼の状態である。台湾海峡をめぐる情勢も予断を許さない緊張感が漂っている。ロシアや中国の独裁国家の動きは殊更周辺諸国との緊張を高めており緩和の兆しは見られない。

国境（ボーダー）の壁は高くなっている。

経済活動に目を移せばクロスボーダー取引は増加の一途であったと言って良いが、これも米中対立の激化、トランプ関税によって潮目が変わるリスクが生じたのは記憶に新しい。サプライチェーンの再編成は着実に進みつつある。

柳沢氏の指摘は世界の状況はボーダーレス化では無くボーダーフル化であると言う。著書の背景である 1992 年当時は 1989 年にベルリンの壁が崩れて東西ドイツの統一がなされさらには旧ソ連圏が崩壊し民主化の波が強まった時期でもあるがその中にあってもむしろボーダーフル化、すなわち国境の壁が厳然として存在し続けると言う指摘である。
事実、グローバル化の見直しが進みブロック化が強まる兆しを経済面でも感じるこの頃である。

柳沢氏は国際人を「日本がどの様な国であるかをちゃんと知っていて、日本人としての考えをきちんと外国人につたえられる人である。また、世界にはいろいろな国があり、日本はそれらの中の一つであることを理解していて、そうした仕組みの中で外国との付き合い方を正しく考えることができるひとである。」
「自分の言葉で外国人と直接コミュニケイトできお互いに等しい距離を置くことが大切である。」と論じる。

小生は彼の指摘に同感するものである。

明治 41 年当時、エール大学教授であった朝河貫一が当時の日本の満州政策を憂慮して「日本の禍機」（講談社学術文庫）を顕わしており、1998 年のアスペンセミナーでこれを題材に議論した思い出がある。ともすれば夜郎自大の風潮が強まる中で「誤れる世評の中にもまた直接に間接に我を啓発することの多かるべきは、欧米諸国間の相互の批評練磨を見て知るべし。」との巻頭の言葉を思い出す。

朝河氏は、国際人としての素養として、義心、意力、公平なる態度、沈重の省慮が肝要とする。
明治 41 年（1908 年）当時、満州への権益拡張に走る日本を憂慮し、世界史を貫く道義に鑑み、日本は人類史上の日本の相対的地位を認識し、狭い視野ではなく客観性を持って日本を見ることの重要性を説いてやまない。

さらには、日露戦争終結につながるポーツマス会議前夜の日露和平シンポジウムの影の立役者を務め、会議自体もオブザーバーとしてこれを見守ったのである。

岡村さんの「人財アジア」を中心とする活動はまさに時代を超越する真の国際人が現下の日本に必要であるとの強い信念に基づくものである。
時代は異なっても、朝河、柳沢、岡村の各氏の主張、信念に相通じるものを改めて認識した正月である。

「人財アジア」の活動の重要性もますます高まること、まさに時代の要請そのものであろう。

B-EAT ビジネス予備校の OB/OG による地域を超えた繋がり

東京でのネットワーキングイベント報告

11/28開催のB-EAT同窓会には36名が参加し、活気ある会となりました。第一部はヘインさん（ミャンマー）・キムさん（韓国）によるプレゼンとグループワークで盛り上がり、個性豊かなプレゼンにも大変刺激を受けました。第二部のネットワーキングでは期を超えた交流が生まれ、アンケート結果は満足度 4.95/5 と高評価を頂きました。

（文筆：B-EAT 東京代表幹事　EAT ビジネス予備校　東京クラス 10 期生　金子 智則 さん）

EAT 株式会社人財アジア
〒100-0005 東京都 千代田区丸の内 1-8-3 丸の内トラストタワー本館 20 階
［TEL］03-6300-6460　［Mail］info@eat-star.asia

特別寄稿および What’ s up?　に掲載して下さる方を募集しています。ご希望の方は事務局までお問合わせのほど、お願い致します。